

東アジアの伽藍神信仰

二階堂 善 弘

On Temple Guardian Gods in East Asia

NIKAIDO Yoshihiro

I have been engaged in research on temple guardian gods in Japan and China, as well as, over the course of several years, investigations into Buddhist temples in Vietnam. I have come to the conclusion that the Vietnamese temple guardian known as Duc chua ong has its origins in India Sudatta (Anathapindika). In mainland China some papers assert an Erlangshen influence from Zoroastrianism. I agree in part with this viewpoint.

キーワード：伽藍神(Temple Guardian Gods)、須達長者(Sudatta)、二郎神(Erlangshen)、
閼帝 (Guangong)、徳翁 (Duc ong)

前 言

これまで筆者は、主に日本と中国の五山の寺院における伽藍神の変容について考察してきた。中国の南宋時代、すなわち日本の鎌倉時代に、禪宗を通じて招宝七郎や祠山張大帝などの神々が日本にも伝来した。そしてそれが日本の寺院において保存されたことから、南宋期の伽藍神の様相が判明することになった。また中国の明代、すなわち江戸時代初期には、黄檗宗を通じての華光大帝の伝来があった。これも明末の姿をいまに伝えるもので、貴重な事例である。現在、中国の大半の寺院では、関聖帝君を伽藍神としている。それ以前の状況が判明したことで、民間信仰の発展の一面を明らかにすることができた。

ただ、日本と中国の寺院における事例のみを考察するだけでは限界がある。筆者はさらに中国の過去の事例を検討するとともに、探索の範囲を広げ、東アジアを中心とした幾つかのアジア地域における伽藍神の事例について調べていきたい。

1 須達長者と二郎神

スグッタ長者（須達長者・給孤長者）については、以前に伽藍神としての事例は少ないと書いた¹⁾。しかし、その後の調査により、幾つかの寺志類に伽藍神としての明確な記載があることが判明した。

まず『弘慈広済寺新志』には次のような記述がある²⁾。

雄寶殿五楹、供三世佛、兩旁列十六應眞、壁繪諸天
 内奉御賜宸翰藥師延壽本願經十部
 香花供養古爐三座
 成化年造古鼎銅鐘
 萬曆年造月臺前古槐二株
 時有神鳥棲集
 東伽藍殿三楹供伏魔大帝、給孤長者、清源妙道眞君
 殿南米庫二楹

1) 筆者「日中寺院における伽藍神の探求」(吾妻重二編著『文化交渉学のパースペクティブ——ICIS 国際シンポジウム論文集——』関西大学出版部 2016年) 401-418頁参照。

2) 釋湛祐遺藁、釋然叢編輯、余賓碩較訂『勅建弘慈廣濟寺新志』卷上「建置」(清康熙四十三年大悲壇藏板)。台湾中央研究院「漢籍電子文獻資料庫」(<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>)の検索による。

広済寺は北京の有名な寺院である。この伽藍殿には、伏魔大帝すなわち関帝、給孤長者すなわちスダッタ長者、そして清源真君すなわち二郎神の三者が伽藍神として祀られていたことが理解できる。

同じ『弘慈広済寺新志』には次のような記載もある³⁾。

丁亥夏、後建伽藍殿中、塑給孤長者、清源妙道、崇寧寶徳二眞君像。右建祖師殿中、塑達磨・百丈・臨済禪師像、正建、大佛寶殿中、鏤釋迦・薬師・彌陀像、左右列十八羅漢尊者、正殿後建大士殿中、鏤観音・文殊・普賢像、至是諸佛像皆飾以金。

これは同じ伽藍殿のものと考えられる。いずれにせよ、関帝・須達長者・二郎神という組み合わせである。

また『雲門山志』には次のような記載がある⁴⁾。

左邊一路梵宇分三大棟、一曰客堂、中為廳、兩旁寮房四楹。客堂上第一層樓、中為廳、兩旁寮房四楹。第二層為鐘樓、懸大鐘一口、鐘聲聞十數里、足以發人深省。二曰伽藍殿、中奉給孤長者、兩旁有寮房四楹。

ここでも、伽藍神の主となるのは須達長者である。同様の記載は、『靈巖略記』にも見えている。

この関帝・須達長者・二郎神という組み合わせは興味深い。二郎神を華光大帝に変えれば、すなわち温州や福州でよく見る伽藍神の組み合わせと等しくなってしまうからである⁵⁾。

その理由については、広済寺などの寺院が北方であるために二郎神が入っているのか、或いは華光大帝の信仰が衰えたために二郎神に置き換わったのかは不明である。時に二郎神と華光大帝が混同されることが多いことから考えると、もともと伽藍神としては華光大帝のほうが一般的であったのが、華光信仰が衰微したために、二郎神に代わったと考えるべきかとも憶測する。ただ、これについては確たる証拠はない。

3) 前掲、釋湛祐遺藁、釋然叢編輯、余賓碩較訂『勅建弘慈廣済寺新志』巻上「碑銘頌・弘慈廣済寺碑銘」

4) 岑學呂撰『雲門山志』第二編「寺院・梵宇三」（民國年間雲門寺排印本）

5) これについては前掲筆者「日中寺院における伽藍神の探求」参照。



福州西禅寺の関帝・須達・華光

2 招宝七郎の称号

招宝七郎は宋代に中国南方で信仰され、伽藍神となり、鎌倉時代の日本に伝わって残った神である。その後中国では信仰が衰え、現在では全くと言ってよいほど信仰が残っていない。

その招宝七郎の称号であるが、或いは五代十国の閩国の泉州刺史であった王延彬が、「招宝侍郎」と呼ばれたことが関係しているかもしれない。すなわち、『十国春秋』には次のような記載がある⁶⁾。

延彬再任泉州、前後歴二十六年、吏民安之。每發蠻舶、無失墜者。時謂之招寶侍郎。

同様の記載は、『五代史』の注釈にも示されている。なお『全閩詩話』などの記載によれば、王延彬は「よく詩をつくり、また好んで仏理を談ず」という記載があり、禪宗にかなり傾斜した人物であることがわかる⁷⁾。

6) 『十国春秋』巻九十五・閩五、なお検索については、関西大学アジア文化研究センター（CSAC）所蔵の『中国基本古籍庫』を使用した。

7) 『全閩詩話』巻一、同様に検索については『中国基本古籍庫』を使用した。

招宝七郎は海神で、海運の神とされるが、その淵源はここにあつて、「侍」の文字がのちに「七」に変わった可能性もある。とはいえ、これには確証はなく、また閩地域（福建）での話が以北に伝わった経路も不明であり、いまのところ憶測に過ぎない。

3 ベトナム民間の神々

ベトナムのハノイ・ホーチミン付近の寺院、それに華人廟などの調査を行った時、ベトナムには別個に伽藍を守護する神があることに気づいた。

ベトナムにおいても、民間の神々が寺院のなかに重要な役割を帯びて祭祀されている。なかでも目立つのは、聖母神である。

聖母信仰はベトナムの民間信仰であるが、大きく道教の影響を受けている。ただ、性格としては娘娘信仰に近いかもしれない⁸⁾。

聖母道の廟としてよく知られているのは、ハノイの西湖のほとりにある西湖府である。こちらの廟では、天・地・水の三府に対応する柳杏聖母・地仙聖母・水宮聖母の三柱を中心に、さらにこれに山の神である上岸聖母^{じやうがん}が加え、四つの聖母神を祭祀する。この聖母の上位者としては、道教の玉皇大帝が据えられている。そのため、玉皇大帝を祀るところも多い。また、聖母の眷属神として、五位大官・四位朝婆・十位皇子・舅・姑・五虎神官などの神々がある。

これらの神々の信仰は道教系とは言えるが、ベトナムで独特に発展したものである。現在でもその信仰は盛んに行われている。

この聖母神は、ベトナムの寺院のなかにごく当たり前祀られている。中国の寺院に閻帝が入っていたり、日本の寺院に稲荷神が入っていたりするのとそう変わりはない。ただ、これが護伽藍の性質を持つかという点、それはやや異なるものと考ええる。

ベトナムでもう一つ有力な信仰は、陳興道（チャン・フンダオ）信仰である。陳興道は、陳朝の将軍で、モンゴルの侵略をたびたび防いだ人物として知られている。

この神の信仰も、ベトナムでは閻帝信仰のごとく普遍的なものである。多くの廟があるうえ、また寺院などでもよく見かける。

その性格としては、伽藍神に近いものがあるかもしれないが、明確に護伽藍という役割であるかは疑問であった。護伽藍神というと、徳翁のほうがそれに近いかもしれない。

8) 聖母道については、「ハノイ歴史研究会」のサイト (<http://hanoirekishi.web.fc2.com/>) 及び、金田力『ハノイの寺』（創土社 2016年）などを参照した。また大西和彦氏（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究員客員研究員）から数々のご教示をいただいた。感謝申しあげたい。



ハノイ西湖府



西湖府にて上岸聖母を祀る

4 徳翁と伽藍神

ベトナムの寺院で、本尊の近くにあつて伽藍神的な位置に祀られるのが徳翁（トゥク・オン、或いはトゥク・チュア・オン）である。

この徳翁の像は関帝とよく似ている。当初は筆者もその違いがよくわからなかった。脇に文官と武官を従え、それは関帝が周倉と関平を従えているのに酷似する。

しかし徳翁は関帝ではない。そのことが明確に看取できるのは、鎮国寺の像である。ハノイの鎮国寺は、ハノイでは最古の寺院とされており、古来信仰を集めてきた。

その本堂には、本尊の両脇に伽藍神が配置される。その伽藍神は、左側に関帝、右側に徳翁となっているのである。関帝の脇には周倉と関平、徳翁の脇には文官と武官を置く。すなわち、関帝と徳翁は別個の神として扱われているわけである。また同時に、徳翁を関帝と似たような性格の神としてとらえていることも明らかになった。

その後、法雲寺、寧福寺、建初寺などハノイ近郊の寺院を探索したが、いずれの場所においても関帝はなく、徳翁か聖母のどちらかが寺院に併祀されている例が多いのがわかった。どちらかというと、徳翁のほうが伽藍神としての役割をより強く担っているようである。



ハノイ鎮国寺の関帝



ハノイ鎮国寺の徳翁

しかしこの徳翁がどういう神であるかは、ベトナムでも多くの人に尋ねたが、判然としなかった。

筆者は現在のところ、この神は須達長者であると考えている。その名称が「徳」であることから見ても、諸伽藍神のなかでは最も近いのではないかと考える⁹⁾。

5 二郎神と祓教

先に見たように二郎神も多くの寺院で伽藍神となっていた。ただ二郎神もその由来は複雑であり、どの段階の二郎神が伽藍神となっているかについては注意しなければならない。先に見た記録は、多くは清代のものであった。この時期には、二郎神の形象もほぼ安定しているので、それほど問題は発生しないかもしれない。

しかし二郎神については、その来歴論争がさらに複雑になっている。もともと二郎神は、三眼であり、三叉の戟を持つことから、ヒンドゥー教のシヴァ神との類似が指摘されてきた。近年では、これに加えて祓教、すなわちゾロアスター教からの影響が議論されている。

9) いくつかのベトナム語のサイトにも、そのように主張しているところがあった。ただ、これについてはまだ今後の検証が必要であると考ええる。

黎国韜氏が2004年に「二郎神之祓教来源」という論文でそのことを指摘したのち、さらに侯会氏が続けて論を展開している¹⁰⁾。中国の民間諸神におけるゾロアスター教の影響については、その後も続々と論文が書かれている。筆者としても、この傾向に注意する必要があるが出てきている。黎国韜氏の論文の概要は次の通りである¹¹⁾。

二郎神は幾つかの戯神（演劇神）のひとつである。その発生と形成については、学界のなかでも様々な論があり、定説がないありさまである。そのなかでは二郎神を李冰とするもの、また趙昱とするものが有力で、民間にも影響を与えているようである。しかし二郎神と祓教の関係については、あまり知られていないように思える。ここでは、二郎神の出自が四川であり、その形成と発展については、四川における祓教の信仰が関係していることを明らかにしたい。特に元・明・清以来の二郎神の形象は、祓教の神々の影響を色濃く受けている。祓教が四川において広がったのは、五代十国の前蜀・後蜀の王室が祓教を信奉したことが大きく作用している。

実際に、二郎神の形象については祓教からの影響を考えるとうまく説明できる部分がある。たとえば、二郎神は必ず犬を連れている。これは『封神演義』の楊戩では、哮天犬という犬を連れていることになっている。二郎神と犬の関連については、これまでの説では説得力が弱かった面がある。しかし、ゾロアスター教の影響であるとすれば、これは説明しやすい。すなわち、ゾロアスター教では犬を重視し、高い地位を与えており、また神々の眷属としてもたびたび登場する。二郎神の三尖刀と三眼についても、祓教には類似の神があり、その影響を想定することが可能である。

侯会氏は、なぜ二郎神の生誕日が旧暦の六月二十四日なのか、それを祓教との関連から説明する¹²⁾。これもある程度の説得力を持つ。ただ侯会氏の論は、あまりに多大な影響を考えすぎのように思える。

筆者としては、明らかに影響関係が認められるものと、単なる類似関係にあるものとを、ある程度弁別すべきだと考えている。世界の宗教で似ている神はあちこちに存在するため、類似だけで論ずるのは、問題が多いようにも感じられる。

10) 黎国韜「二郎神之祓教来源——兼論二郎神何以成戯神——」（『宗教学研究』2004年2期）78-83頁、及び侯会「二郎神源自祓教雨神考」（『宗教学研究』2011年第3期）195-203頁

11) 前掲黎国韜「二郎神之祓教来源——兼論二郎神何以成戯神——」78頁「論文概要」より

12) 前掲侯会「二郎神源自祓教雨神考」197頁

特に二郎神の場合は、長い時間をかけて様々な要素を取り込んでいった神であり、形象にしても一意的には決まらないものとする。たとえば、二郎神の有名な三眼であるが、元・明期にはむしろ二眼であることが多かった。これについては別の論文で論じた¹³⁾。

さらに、二郎神は水神の性格が強いこともある。祓教は拝火教といわれ、そもそも火を重視する傾向が強い。もっとも、祓教にも様々な性格の神があり、侯会氏は祓教の水神の影響を指摘する。しかし、これも全面的には認めがたいものがある。

ただ、祓教の影響を考えると容易に説明できる部分については、確かに説得力がある。筆者も二郎神の形象の一部分については、祓教の影響を肯定したいと考えている。

とはいえ、火神ということであれば、むしろ華光大帝のほうに影響がありそうである。もっとも、華光もかなり複雑な成立背景があり、簡単には論じられない。また、華光と二郎神については互いの影響を考察すべきであるとする。これは今後の課題としたい。

結 語

伽藍神について、探索の範囲を広げ、須達長者、二郎神、それにベトナムの徳翁などを取りあげて論じた。なかでも、徳翁は須達長者と同じ神であると筆者は考える。さらに、祓教と二郎神について、一部に影響があると考えた。

祓教を考慮に入れた場合、もうひとつの宗教も考えに入れなければならない。それはマニ教である。マニ教は中国では摩尼教と書かれ、祓教と時を同じくして流行した。その後、マニ教も衰えたが、民間信仰のなかに入って、影響力を行使することになった。現在でも、福建地域において、マニ教寺院が幾つか残されている。福建における影響ということでは、華光大帝とも関連がありそうである。ただ、これもかなり大きな問題であり、後日検討を加えたい。

13) 筆者「二眼の二郎神」『東アジア文化交渉研究』（関西大学東アジア文化研究科 2014年第7号）217-228 頁